

じょうきゃくは、ちらっとカイをみて、すぐに目をふせて  
 しまいます。カイは、ちよっぴりこころぼそくなりました。  
 いちばんうしろのしゃりょうまでやってきたときです。  
 カイは、きいろいふくをきたおねえさんに、こえをかけ  
 られました。

「ねえ。きみ、きみ」

おねえさんは、となりのせきにおいていたにもつを、い  
 すのしたにしようと、すわるばしょをつくってくれました。  
 「ここへ、どうぞ」

カイは、おねえさんのとなりにこしかけると、リュック  
 サックをおろしました。

「ひとりでれっしやにのってるの？　すごいわね。どこま  
 でいくの？」

おねえさんは、カイにききました。

「『まちのえき』までいくんだ。しごとで、とおくではた  
 らいてる、おとうさんにあいにいくんだよ」

カイはこたえました。

「いつもは、おかあさんといっしょにくるんだけど、きょう  
 うはようじで、どうしてもこられなくて。ぼく、こんやは、  
 おとうさんのところにとまるんだよ」

「それは、たのしみね」

おねえさんはわらいました。

「おねえさんこそ、どこにいくの？　すごいにもつだね」

おねえさんは、ひざのうえにも、あしのしたにも、あた  
 まのうえにも、おおきなふくろをもっています。すぐそば  
 のかべには、あかいつえがたてかけてありました。

「わたしは、かいものについてきたかえりなの。もうすぐ  
 つく、『もりのえき』でおりるのよ」

『もりのえき』？」

カイはいいました。

「ぼく、おれたことないや。なにがあるの？」

『もりのえき』のちかくには、わたしのいえがあるの。  
 うちには、そだちざかりでたべざかり、あそびざかりでや  
 んちやざかりの、こどもが四にんいてね」

おねえさんはいいました。

「きょうは、みんないえで、わたしのもってかえるおみや  
 げをまってるの。きつとたのしみにしてるわね」

「へえ、いいなあ」

そのとき、れっしやのなかにこえがながれました。

「まもなく、『もりのえき』にとうちやくです」

「あら、たいへん。もうつくわ」

れっしやはスピードをおとし、ちいさなえきにとまりま  
 した。

『もりのえき』。『もりのえき』です。にもつのつみこみ  
 のため、しばらく、ていしゃいたします」